Vol. 112, No. 5　June 2015　　題字　故 一萬田 尚登氏

月刊インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会（日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 112 年）

〈東大寺で披露された菩提僊那像　於 2015 年 5 月 18 日〉

写真提供；NPO 法人日印交流を盛り上げる会

目次

1. 西訪雑記（前編）…… P. 3
2. ベンガルール便り …… P. 7
3. インドニュース（2015 年 5 月）…… P. 9
4. イベント紹介 …… P. 12
5. 新刊書紹介 …… P. 16
6. 掲示板 …… P. 19

1. 西訪雑記(前編)
Chalo Bharat

公益財団法人日印協会 参与
里見 駿介

本年4月末から約1週間インド(デリー・コルカタ)を訪問したが、エアインディア(以下AIと略)の日印間・インド国内線共に同社便を利用させて頂き、快適に移動出来たことに、先ずは感謝を申し上げます。

デリー(徳里から以下“徳”と略)は約5年振り、コルカタ(甲谷陀から以下“甲”と略)は何と25年振りでしたが、両都市の変貌はネットや諸メディアで承知していた心算乍ら、その発展には改めて驚いた次第です。

風・空気・熱気、香り・匂い・・に触れた街の様子等を主に雑駁でお恥ずかしいのですが、今回の印象の一部を思い出す侭に写真を交えお伝えしたいと思います。

インドへ

- 筆者のインド初出張は1970年春、AIにて。その後何度も同社便を利用。今回搭乗時にはお香(アガルバッティ)の芳香がするかと不図思いましたが、それは昔のことでした。本年はAI日印間就航60周年とのこと、おめでとうございます。
- 機内誌を眺めインドの週刊誌も手にした処、表紙にNetajiの似顔が描かれた4月20日付「INDIA TODAY」“SNOOPING ON NETAJI How Nehru's Government Spied on Subhas Chandra Bose's Kin for Nearly 20 Years” なる特集に気付きました。
  本文記事は写真や系図入り10頁の物でした。ネタージーに関しては専門家も多く本特集のことも御存知と思います。更に27日付同誌(英語・Hindi語)にもモディ首相が訪独時にSurya K Bose氏と対談時の写真も大きく載った特集もありました。尚、本ボース氏には昨年当協会員のN氏と共に鎌倉を御案内したので懐かしい気がしました。その他『OUT LOOK』誌にも特集、コルカタの『Business Standard』紙でも報じられていました。
- うとうとしていたら、未だ明るい夕刻にオンタイムでインディラ・ガンディー国際空港第3ターミナル(T3)(写真1)に安着。以前日印官民案件のお手伝いで同地に長期出張中は、T3は開港前でしたので、改めて本空港の立派さには驚きました(大昔のパーラムが一寸浮かびました)。入国検査も簡単で、到着フロアにもDuty Free Shopがありました。荷物の出てくるコンベアーの案内は判り難かったですが、知り合いとなったインドの方達と探し、トランクも早く出てきてほっと。両替所も直ぐ傍にあり便利で少し換金、昔の習性でつい数え直し、お札の汚れもチェックしてしまいましたが、ノープロブレム、税関・検疫検査もノーチェック(但し日や係官により違うかも)、諸検査無事終了。現地での空港送迎やホテル手配等は、事前に日本でインド旅行専門会社の当協会会員に頼みましたが同社の迎えの方が出口のすぐ近くでプラカードを持って待機、無事に乗車。但し、国際線・国内線を問わずT3の場合は時に同じビルでも出口が一寸だけ離れて違う時がある様故、旅行される方はミーティングポイントを都度良くチェックされたら良いと思いました。話は聊か違いますが、筆者も若い頃はバックパッカーを気取った時もありましたが、安全な車・運転手の手配はいつも大切ですので若い方達は無理されぬ様頼みます。
  昔は空港内外や場所により写真撮影は厳しかったので今回も事前に関係者他にも尋ねましたが、特に問題はありませんでした、念の為。

〈写真1〉

- 当日は、ネループレイスのジェトロからも程近い宿坊に直行、馴染みのお坊さんに合掌で迎えられ、精進料理を済ませベッドに。夜中 11 時頃、大きな音で眼が覚め外をそっと覗いたら、乾季には良く観かけるあの結婚式の行列。爆竹・太鼓・笛の歓迎と判り嬉しくなりました。

<写真 2>

<写真 3>

甲へ

- T3 迄の道路は一層整備され順調でしたが、バスから唾を吐く人を久方振りに見掛けました。AI カウンターでチェックイン後は国内線も国際線も同じ入口で聊か戸惑いましたが、代理店の知り合いの空港関係者の案内で通路を教えて貰い、厳重なセキュリティ他も無事終了、搭乗直前にゲートの変更などありましたが、良くあるみたい故ご参考迄。
- 木曜の飛行も順調、タゴール翁の“ショナール・バングラー”に近付くにつれ北インドとは違うガンジスデルタの緑、煉瓦工場等も増え、バングラデシュにも多年駐在した筆者には懐かしい風景が夕方の機外に見えてきました。旧ダムダム空港は72年頃から何度も利用しましたが、新たなNetaji S. C. Bose 国際空港は想像以上に本当に立派で驚きました(写真 2・3)。
- 空港からパークストリート近辺のホテルへの途次、事前手配の車の運転手さんは気を利かせて薄暮近いChowronghee やモイダン辺りを態々回って呉れた様で、何処か懐かしい街並み(写真4)を感じ、昔ながらのサトウキビ・ジュース屋台(写真 5)も見ました。自分の記憶力の不確かさを改めて実感しました。只、昔は塀やら壁に燃料用の牛糞がべたべた貼られ、“牛糞の煙たなびく甲”と思った街並みは翌日以降も見掛けず、勝手ですが一寸残念な気はしました。でもバングラデシュ独立の頃の路端生活の所謂難民の姿は当然乍らなく、今は昔でほっと。多くのアンバサダータクシー、リキシャも目にし、路面電車も見掛けました(二両連結で幾つかの色に塗られた電車は実用よりヘリテージ的意味もある由)(写真 6)。

<写真 4>

<写真 5>

<写真 6>

金曜日

- 金属関係の日系商社の駐在員の方が朝ホテルに来てくれて、30 分程一般事情をお聴き出来、更にその後、日系総合商社を訪問しナショナルスタッフ(邦人は駐在せず)に挨拶。
- ハルディアに工場を持つ日系化学品会社の甲本社を午後に訪問。多数の社員の方が活発に勤務されていました。日本人駐在員の方からは原料・製品の物流上の問題等々もお聞きしましたが、マンゴーの季節になると街に運んできたトラックの帰りカーゴが少なくなるので運賃が安くなることがあるとの由。偶々昼食時に当ったこともあり予備とのことでしたが、邦人社員用の幕の内弁当を美味しく御馳走になってしまい申し訳なく思った次第。「お弁当は工場も本社も同じで、皆非常に喜び、士気も上がっている」とのことでしたが、その通りと確信しました。材料は可なりを輸入しているが、通関時に問題が発生し、時間を要し困る時もあると。日本人は約 45 名(甲在留邦人の約半数)とのことでしたが、心身の健康管理にも当然配慮されていました。尚、日本人会・商工会と同社社員は固より各社日印社員・家族も一緒に「恋するフォーチュンクッキー インド・コルカタ編」(You Tubede で視聴可能)を行い、好評を博したとのこと。

  子女の教育も話題になりました。日本人学校は今はありませんが、補修授業校は 2011 年末に再開されたとのことです。校長先生は、日本インド学生会議とも関係あるニガム和子様にて、電話で御挨拶はさせて頂きました。
- 午後遅くですが Tollygunge にある風格ある日本国総領事館を表敬訪問。総領事館への往復の際、交通渋滞他の関係もありましたが Netaji Bhawan(写真 7・8)、Kalighat 寺院等に短時間立ち寄れました。

〈写真 7〉

〈写真 8〉

土曜日

- 先ずはコルカタ・インド博物館を開館早々訪問したが、正門前の大通りに高架橋が設置されたこともある為か、建物また周辺の印象は若干違った感。入場料は外人 Rs. 150 / インド人 Rs. 10、カメラ持ち込み料は Rs. 50、荷物はクロークで保管。

  多くの仏様は御存知の通り、上野の東京国立博物館にお出で頂いていた時ですが(日本の前は上海にお立ち寄り)、留守をお守りの神仏様(写真 9)に懐かしく再会出来、また広い芝生の中庭(写真 10)に出て昔の訪問時の記憶が少し蘇りました。

〈写真 9〉

〈写真 10〉

小一時間でミュージアムを失礼し、若い頃に買い出しもした近くのニューマーケット辺り・屋台街(写真 11)を散策していたら、その時急に可なりの人が声を出し乍ら建物から出てきました。長年の習性からか、何かテロだか喧嘩だかと一瞬思い、ゆっくり・足早に移動したが、更に店等から出て来る人が増えました。暫くしたら落ち着いた感がしたのでまた露店を冷やかし、運転手と会うべく博物館前に戻ったら切符売り場は何故か閉鎖。

<写真 11>

暫し目抜通りを走るも、多くの高層ビルから出て来る人は減らず運転手とも話したが昼飯時の為でもなさそうだが理由は不明。そのうちに地震の所為らしいとの話。

特別異常も感じなかったので、ヴィクトリア記念堂(写真 12)、モイダン、ハウラー橋(写真 13)を車上から眺めました。

<写真 12>

<写真 13>

タゴールハウス(写真 14・15)にも一寸寄ることが出来ました。其処ではバングラデシュからの観光客とも会い、「バングラを知っているか? 」と訊かれたので、「私は、“ダカイヤ”(江戸っ子ならぬダッカっ子)”」と応じたら、大喜びで記念写真となりました。

可なりの雨も降ってきたので早目に宿に戻り、TV ニュースであの“ネパールの大地震”だったことを初めて知り、犠牲者の方達に合掌をしました。

尚、甲の知人に依れば自宅の電燈なども揺れたとのことで、高層マンション住いの方達は可なりの振動を感じたそうです。

<写真 14>

<写真 15>

翌日曜日に朝の AI でデリーに戻りました。

コルカタ迄のことは不取敢この辺にて終わらせて頂きます。その後のデリーに於けるあれこれ、その他は次号でもう少しお伝え致したく存じますので、宜しくお願い申し上げます。

続く

2. ベンガルール便り
From Bengaluru

公益財団法人日印協会会員　鈴木 成子

2011 年 11 月、カルナタカ州の州都ベンガルールに着いた日は、気温が 30 度近くありました。ベンガルールの気候はしのぎやすいとの定評がありますが、しのぎよさを感ずる日々が年々少なくなってきています。ここ十何年間に IT 産業などで急激に発展して人口が増加の一途をたどり、木の伐採、湖の埋め立て、道路の拡張、高層ビルの建設、車の激増などで、空気汚染が進んでいるせいでしょう。今年の 3 月 4 月は例年以上に暑い日が続きました。落ち葉がカラカラと音を立てるほどに乾き、気温が 38 度までに達したときは、土地の人もぐったりして、これまでこんなに高い気温になったことは無かった、と言っていました。それでも時ならぬ雨が降るとさっと涼しくなって、ベンガルールはいいなあと思えるのです。ここの雨の降り方には、午前中と日中は晴れて夕方と夜に降るというパターンがあります。働きに出なくてよい私には都合の良い降り方ですが、働いている人たちにとっては別問題。道路がすぐに浸水して交通渋滞をひきおこし、帰宅困難におちいるからです。道路は穴ぼこが多く、スピードブレーカーになっている道路を直角に横切る出っ張りが、浸水で見えなくなり、とても危険です。バスも自動車もオートリキシャもバイクも、用心しながらゆっくりと進まざるをえません。普段ならば 30 分で行ける道を、2 時間も 3 時間もかけて行くのは、本当に辛いところです。公共の足としての電車や地下鉄が発達していないので、道路を行くしかないのです。高架のメトロは短距離区間しか完成しておらず、市の周辺を環状に走る汽車も、利用できる区間が限られます。

〈高架になっているメトロの車窓から
金色のヒドゥー寺院と街並みを見る〉

のっけからベンガルールの弱点をあげてしまいましたが、インドの他の都市や地方からここに移り住んだ人々にとっては、そういうことよりも、ベンガルールの良い面に強く印象づけられて、気持ち良く、安住できる場所になっているようです。その良い面はなんといっても、開放的で他人を暖かく受け入れる土地の人々の気性です。見ず知らずの人にでも目が合えば明るい笑顔を見せるし、道をたずねると誰でも親切に教えてくれるし、買物をすると気持ちの良い応対がかえってくるし、住み始めると隣人たちがすぐにうちとけてくれます。みんな大らかな表情をしているので、新しい土地に住む緊張感がこれほど少ない都市は、ほかにはあまりないでしょう。ベンガルールに 4 年半以上住んで思うのは、人々がこんなにのんびりと気楽でいて、他人を気にせず、言いたいことは遠慮無く言ってあとはからっと忘れるようでは、ストレスが溜まらないだろうなあ、ということです。

〈市内のマーケットの様子〉

この気楽さ、大らかさはどこからくるのでしょうか。根本的には、その地勢によるものと思われます。

〈中心部にある湖〉

ベンガルールは、インド大陸南部で内陸部の、標高 920 メートルの高さに位置しています。その地勢を歴史的にみると、外国勢がインド大陸に進入してきたルート(インド北西部のヒマラヤ山脈方面と、インド南端部のカンニャクマリ(コモリン岬)をターニングポイントとして東のコルコタ、西のスーラトまで延びる沿岸部)から離れた場所にあるために、外部からのあつれきがそれほど多くはなかったことが、人々に荒々しい気性を与えずにすんだのでしょう。

さらに、デカン高原のはずれにあって地盤がしっかりしているために、北部インドで起きるような地震の被害は無く、毎年インド沿岸部をおそうサイクローンの影響もほとんど皆無といえることです。

〈土地の人の屈託の無い笑顔〉

市内を川が流れていないので、大雨による川の氾濫もありません。緑が多く、湖が多く、気候が温暖で極端に暑くも寒くもありません。庭園都市、エアコン都市、年金受給者天国、とも呼ばれていたほど、恵まれた環境の元で暮らせたことも、おだやかな気性の一因だと思います。

人種的には、原住民であるドラヴィダ系の人々が住む土地ですが、あとから入りこんだ人々との人種や宗教の違いによる争いがなく、余計な緊張感を持たずに安定した暮らしができることもベンガルールの良さです。

以上のような恵まれた環境のおかげで、ベンガルールには早くから最先端をいく科学・技術の研究施設が置かれ、ついで大企業が進出し、IT 産業が興隆し始めるとまたたくまにその拠点となりました。時代の先端をいく科学技術の場であると同時に、文化的には濃い伝統色を残す中流階級都市として育ちました。

ベンガルールはまだまだ発展しそうです。大きなモール、レストラン、ホテル、高層アパートメントとヴィラ、近代的な医療設備が整っている病院などが次々とできて(左写真)、国際色豊かな都市へと様変わりし続けています。あとは、メトロ網が完成して交通の便が良くなり、急発展に伴う生活上の諸問題に行政が真剣に取り組んで、ベンガルールの発展と庶民生活の改善が足並みをそろえて進み、豊かな未来を築けることを願うばかりです。

筆者紹介　　鈴木 成子(すずき・しげこ)
『まるごとインドな男と結婚したら』(2013年 彩流社)著者。
1970年代初めに、初めてインドに行く。
現在、バンガロールに在住し、美大の彫刻科に通う。

3. インドニュース（2015 年 5 月）
News from India

Ⅰ. 内政

5月9日

● 各種報道によれば、9日、モディ首相は、就任後初めてチャッティースガル州を訪問した。モディ首相の訪問に合わせて同日、同州内でナクサライトによる集落襲撃事件が発生したことを受けて、モディ首相はナクサライトに対して同州内での演説で襲撃を止めるよう訴えた。

5月9 － 10日

● 各種報道によれば、9-10日、モディ首相は、西ベンガル州を訪問し、バナジー州首相と会談したほか、国営鉄鋼会社IISCOの近代化プロジェクト完工式に参加した。モディ首相とバナジー州首相は、お互いに、中央と州が「チーム・インディア」として協力する重要性に繰り返し言及した。

メモ:
対立関係にあった、モディ首相とバナジー州首相が、友好的な関係を見せたことの背景として、モディ首相は、バングラデシュとの陸上国境線画定協定の円滑な実施、ティエスタ河水配水問題解決に向けた州政府の協力、および物品サービス税（GST）等法案国会通過のための、州与党AITCの支持取り付けを、今回の訪問の目的としていたとみられる。他方、バナジー州首相は、Saradha投資詐欺事件へのAITC指導部の関与についての懐柔、州政府債務の減免と返済猶予、IISCOや州内の工業地域への投資誘致につき中央政府の支援を求めたとみられる。

5月13日

● 予算国会が閉幕。今国会は、2月23日に開幕、約1ヶ月の休会を挟み、上下院ともに5月13日に閉会した（下院は重要法案の審議時間を確保すべく3日間の延長が行われた）。本国会では23法案（うち、7法案は予算関連）が可決された。

メモ:
今予算国会では、長年の懸案であった保険法改正法案が成立。他方、モディ政権が成立を目指していた、土地収用法改正法案、およびGST（物品サービス税）法案は、与党が多数を占める下院で可決されたものの、与党が少数である上院では採決されなかった。今回可決に至らなかった重要法案については、次のモンスーン国会（7月～8月頃）での可決を目指す方針。その他重要な法案としては、炭鉱売買に関する炭鉱法（特別条項）改正法、および鉱物資源採掘用地の貸与に関する採鉱・鉱物法改正法の成立、青少年（16-18歳）が重罪を犯した際に成人と同じ法律で裁くための青少年裁判（子供の保護育成）法（Juvenile Justice (Care and Protection of Children) Act)の改定法の成立、インド・バングラデシュ間の国境画定に係る条約及び議定書を批准するための憲法改正法案の可決が挙げられる。

5月23日

● 各種報道によれば、5月11日、カルナタカ高等裁判所は、昨年9月に不正蓄財の罪で禁固4年の実刑を受け、バンガロールの刑務所に収監中のジャヤラリタ前タミル・ナド（TN）州首相に無罪判決を下した。これを受けて、22日、パンニールセルヴァムはTN州首相職を辞任し、翌23日、チェンナイ市内のマドラス大学講堂でジャヤラリタ女史の州首相就任宣誓式が行われた。

Ⅱ. 経済

5 月 29 日

● 9 日、インド政府統計・計画実施省（MOSPI）傘下の中央統計局（CSO）は、2014 年度 GDP 成長率を前年 度比 7.3%と発表した（政府予想は 7.4%）。

メモ：
2014 年度実質ＧＤＰは 106.44 兆ルピーの見通しで、2013 年度の 99.21 兆ルピーに比した実質ＧＤＰ成長率は 7.3%となった。また、2014 年度第 4 四半期の実質ＧＤＰ成長率は前年度比 7.5%と発表された。なお、

第１四半期は前年同期比 6.7%（修正前 6.5%）、第２四半期は同 8.4%（修正前 8.2%）にそれぞれ上方修正されたが、第３四半期は同 6.6%（修正前 7.5%）となり、第３四半期の大幅な下方修正が年度全体の伸びを引き下げた形となった。
（注：インドではこれまで統計上、要素価格表示のＧＤＰを用いていたが、１月 30 日の国民経済計算の基準年度改定に伴い、それ以降は市場価格表示のＧＤＰを使用することとなった）

Ⅲ．外交

● 5月14日－16日

モディ首相は中国を訪問した。モディ首相は、15日に、北京で李克強中国首相と首脳会談を行い、共同声明及び気候変動に関する共同声明を発出した。この他、モディ首相は、14日に西安を訪問し、習近平国家主席と会談を行った他、兵馬俑、興善寺、長安城の城郭等を見学した。16日には、上海を訪問し、中国企業家達と面会した。

＜共同声明に記載された主な事項＞

*両国間のコミュニケーションの強化

－首脳レベルの定期的な訪問を行うことで一致。

－インドの州と中国の省とのリーダース・フォーラムを設立することで一致。

（15日、北京にて、モディ首相と李克強首相の出席を得て、同フォーラムの初会合が開催された）

－インドは成都に新たな総領事館を開設し、中国はチェンナイに新たな総領事館を開設する。

－軍事面での関係強化が相互信頼の構築に資すると確信。

（中国側は、2015年中にインドの国防大臣他軍事指導者に対し中国訪問の招待を行った他、2015年中に中国において両軍間で第5回合同対テロ訓練を実施する）

－国境問題を含む未解決の相違点を積極的に解決する。

*より緊密な開発的パートナーシップの次のステップ

－貿易･投資の障害の除去、相互の経済への市場アクセスの拡大促進等のため両国の地方政府の支援を行う。

－戦略的経済対話が二国間経済協力の新たな分野を模索するための重要なメカニズムであることにつき合意。

－スマートシティ開発における協力開始、宇宙空間及び原子力エネルギーの平和利用等の分野での協力開始･拡大について歓迎。

*文化･人的交流

－拡大教育交流プログラムへの署名を歓迎。

－2015年後半にインド・中国双方から200名の青年の年次交流を実施する。
－カルナタカ州と四川省のパートナーシップ、アウランガバードと敦煌市、及びハイデラバードと青島の姉妹都市創設の合意を歓迎。

メモ:
気候変動に関する共同声明においては、両首脳は、気候変動に係る二国間のパートナーシップを更に促進すること等を決定した他、国連気候変動枠組み条約（UNFCCC）と京都議定書が気候変動に対応する国際協力として最も適切な枠組みであると強調。衡平の原則及び共通に有しているが差異ある責任の原則を主張し、温室効果ガス排出削減や、途上国への資金、技術、キャパシティ・ビルディング支援の提供における先進国のリーダーシップを求めた。また、両首脳は、印中国内での取組みや国内での気候関連政策及び多数国間交渉に係るハイレベル二国間対話の強化及び実践的な二国間協力を更に強化することを決定した。

5月17日

● モディ首相は、インド首相として初めてモンゴルを訪問した。モディ首相は、サイハンビレグ・モンゴル首相と会談し、両者は、インド・モンゴル関係を「総合的パートナーシップ」から「戦略的パートナーシップ」に格上げした。

5月18日－19日

● モディ首相は韓国を訪問した。モディ首相は、18日に、朴韓国大統領と首脳会談を行い、共同声明を発出した。モディ首相と朴大統領は、インド・韓国関係を「戦略的パートナーシップ」から「特別戦略的パートナーシップ」へ格上げすることや「2+2」を新設することについて合意した。この他、韓国はインドのインフラ整備に対し100億ドルの支援を行う旨発表した。

5月26日

● 26日付インド外務省の発表によれば、モディ首相は、6月6日から同7日にかけて、バングラデシュを訪問する。モディ首相は、バングラデシュ訪問中、ハシナ首相と会談する他、ハミド大統領を表敬する。

今月の注目点： モディ政権１周年

５月２６日、モディ政権は発足１周年を迎えた。同日、首相府は、「首相から国民に対する手紙」を発表し、その中で、モディ首相は、自身を、国民に奉仕する「Pradhan Sevak（Primary1 Servant）」とし、心血を注いで、日々一瞬一瞬を捧げてきたと述べた。

内政では、モディ首相の強力なリーダーシップの下、「Make in India」のスローガンに代表される製造業の誘致や、衛生面での意識改革を掲げた「クリーン・インディア」キャンペーン、反汚職政策に積極的に取り組んだことが高く評価されている。他方、様々なアイデアを打ち出している経済政策については主立った成果が出ていないことに対する不満、大企業向けの施策が優先されているとの批判が目立つ。前政権時から議論となっていた、土地収用法の改正やＧＳＴ法案については、上院で過半数を持たない「ねじれ現象」により、現在でも成立の見通しが立っていない。そのため、最近では、農村や貧困層向けの施策も打ち出している。また、ＢＪＰ政権発足を背景に、一部の団体によるヒンドゥー・ナショナリズムの高揚から、キリスト教徒、ムスリムなどへ攻撃、強制改宗が各地で発生し、マイノリティの保護が大きな社会問題となった。

外交は、モディ政権の成果として大きく評価されている部分の一つである。特に、新たな主要国としてのインドというアイデンティティを広く打ち立てたことが、最大の貢献と評価されている。訪米によって、それまで停滞していた対米関係を安全保障面で再強化し、中国との関係では、相違を明確化するのではなく戦略的かつ長期的な関係を追求し、経済関係の深化に向けた協力を確認した。また、インドの伝統的な「Look East」政策を「Act East」政策と行動重視の方針を明確化し、日本を初めとするアジア諸国と経済・安保関係の強化を図るとともに、オーストラリアや島嶼国に及ぶ太平洋地域も訪問し、インドの活動範囲を広げた。モディ首相は、国民に対する手紙の中で「これは始まりに過ぎない」とし、これからの変革が重要であることを強調した。モディ首相がインド経済を大いに転換させ、その任期中に急成長を推し進めることができれば、インドの国際社会での重要性は名実共に確立するであろう。

4. イベント紹介
Japan-India Events

=◇ 最近のイベント ◇=

◆駐日インド総領事アシーム･マハジャン氏 歓送会 ― バングラデシュへのご栄転に寄せて ―

〈中央：挨拶をされる大使
左：マハジャン総領事
右：総領事令夫人〉

大阪･神戸インド総領事アシーム･ラジャ･マハジャン氏がバングラデシュ･ダッカへ首席副高等弁務官(DCM)として、突然、御赴任されることとなり、5月12日に総領事公邸にて総領事の送別会が開かれました。多くの関西の各界の要人、日印交流関係者、ディーパ･ゴパラン･ワドワ駐日インド大使もご臨席されました。史上最年少(今年42歳)の駐大阪インド総領事、史上最短の任期。マハジャン氏は2013年9月2日の赴任から、西日本において日印関係の発展に多大なる寄与をされ、極めつけは、昨年8月末のナレンドラ･モディ首相の突然の京都訪問にあたっては、氏は司令塔で、沈着冷静に瞬時に次から次に起こる事態を見事に納められました。光栄なことに、その際、当会大阪大学学生会員に人力補強のお手伝いができる機会を与えてくださいました。大阪大学生達は首脳会談を至近距離で垣間見たのです。

その前舞台として、着任早々、今上陛下･皇后陛下訪印直前の、2013年の10月、大阪大学でのワドワ大使の御講演時、実行員会のメンバーである当会大阪大学学生会員達に惜しみない支援を与えてくださいました。

実はちょうど10年前の2005年5月に東京にて、当時、二等書記官でありましたマハジャン氏のラオスへの赴任にあたり、日印協会主催の送別会が新宿の中村屋で行われ、私はその送別会にも参加しました。その際に、当時のトリパティー大使が御臨席されていました。トリパティー大使は6月には大使公邸で大使主催の送別会を催され、私はそれにも招待され参加しました。奇縁であります。そして、先日の送別会では、ワドワ大使は、わざわざ東京からお見えになり、バングラデシュはインドにとって極めて重要な隣国であると触れられ、氏の任務は重要であり、名誉ある栄転であると最大限の激励と祝意の言葉を述べられました。

個人的な話で恐縮ですが、2001年に私が日印協会入会直後、マハジャン氏が日本語選択されて三等書記官を拝命され任務を開始された年ですが、15年来の古い友人であります。氏とは離日後どこにいても交流を絶やしませんでした。今回の突然の離任は残念でしかたがないのですが、日本で勤務される機会が再びあるようにと祈っています。

最後に、マハジャン総領事を知る首都圏の古い当協会員や、インド人コミュニティーの皆さんの極めて多くは、氏がインド外務省の知日派のエースであることをご存知でしょう。

〈文･写真；公益財団法人日印協会 個人会員　阪本 倉造〉

◆インドにおけるにおける日本工業団地情報

『インドにおける日本工業団地セミナー』がJETROと野村総研主催で5月12日に開催されました。インド･モディ首相の主張する“Make in India”スローガンに呼応して、日本政府がインドの主要な工業団地を後押しする事業が開始し始めました。具体的な工業団地場所と団地名は、下記の通りです。

1. アンドラ･プラディッシュ州南限とクリシュナパトナム港の間の地域
2. カルナタカ州トゥムクゥル工業団地
3. タミルナド州ポネリ工業団地
4. タミルナド州ワンハブチェンナイ工業団地
5. タミルナド州双日マザーソン工業団地

6. ハリアナ州ジャジャール工業団地
7. マハラシュトラ州スパ工業団地
8. ラジャスタン州ニムラナ工業団地
9. ラジャスタン州ギロット工業団地
10. グジャラート州マンダル工業団地
11. グレーターノイダの東郷工業団地

11 か所が、政府間で合意されているようです。

既に、動いている日本企業もあろうかと思いますが、今後インド進出をお考えの日本企業にとって参考になるかもしれないとの思いで、紹介します。

なお、ご興味がおありの企業は、JETRO や野村総研にお尋ねください。

◆第 37 回 様々なインド 『日印学術交流について』

5 月 15 日(金)、午後 6 時から定員の 30 名近い参加者に対し、当協会会員の秦智さんに日本語教育・日印間の留学生交換・学術文化交流他広範囲の講演をして頂き、皆様にご満足を頂きました。

これらの経験に基づき当日は種々の分野の話題も出ましたが、ご自身の日本語教育面での体験や人的交流面等に付き順不同ながら一部をご紹介させて頂きます。

講師の以下の話には考えさせられたので、先ずはお伝えしたいと思います。

毎回授業時間直前に、“先生あと 5 分で…”と連絡してくるインド人学生がいた。処が実際にはいつも 30 分以上遅刻して来る。終に頭にきて、一体どういう積りなのか問い質すと、“先生に 30 分遅れるなんて、そんな失礼なことはとても言えません”と。

☆日本語教育：

日本語教育の更なる普及には、優秀な教師の確保・出席率を如何に良くするか・教材の入手の難しさ・生徒とのコミュニケーション他種々問題点がある。これ等の改善策の一つとして学外での交流活動にも注力した。

例えば、ジャパン・ハッバ(Habba とはカンナダ語でお祭り)では“より近く、より深く、より熱く”を目指し、日本人学生がヒンディー語やウルドゥー語の語劇をし、インド人日本語学習者がマハーバーラタを日本語で演じたり、日本人女性たちがボリウッドダンスやインドの歌、インド人学生が盆踊りや日本の歌を披露したりした。バンガロール大学とインド人日本語教師が主体となり、領事館、国際交流基金、地元日本人会、現地進出企業等のサポートを得て、日本に関心のあるインド人と、在留邦人が一体となって企画し、準備し、参加し、運営もする年中行事として、回を重ねる毎に内容も豊富になり、規模も拡大を続けている。

またコーヨーグループ(Japanese Speaking Meet-up)とかスピーチコンテスト他も行った。

インドに於ける日本語教育は私塾主導と云える。

日本語学習者数は 1974 年 573 人、2003 年 5,466 人、2012 年 20,115 人と推移している(国際交流基金調査)。インド人の主要留学先としては 2010/11 時点の各種統計では米国(103 千人)、豪州(48 千人)、英国(39 千人)が断トツで、星国が 12 千と続いている。本 4 か国は英語での学習が可能なこととインド人同朋が多いこともあろう。我が国は本時点では 537 人。因みに他の国では中国(9 千人)、独国(5 千人)だが、ドイツは留学生も授業料が免除の模様。

尚、日本へのインド人留学生は2001年の235人から2014年の727人と増加はしているが、未だ日本との馴染みが少ないこと他、後述の理由もあると思われる。

☆ **"グローバル30(G30)"：**

我が国大学国際化推進の為のネットワーク形成推進事業だが、2020年迄に日本への留学生数を30万人とすることを目標とする。その為、2009年度から2014年度迄の5年間のプロジェクト期間中、以下の取り組みがなされた。

- 英語によるコースの設置：
- 国際化拠点としての総合的体制の整備：
  留学生向け支援(宿舎･文書英文化･渡日前入学許可制度･奨学金・・・その他)
  海外大学共同利用事務所設置(インドではニューデリー、ベンガルール二か所)
- 産業界との連携、拠点大学間のネットワーク

講師が初代事務所長の立命館デリー事務所、東大ベンガルール事務所もG30に沿い諸施策を行ってきた。その為馴染み深くなり、留学先の認知度アップの宣伝も出来たとは思うが、招致活発化の為、日本留学フェア(セミナー･カウンセリング･願書準備等々) / アニメコンベンション参加 / 日本児童絵画展 / TV 会議システム活用の交流他も積極的に行う。フェローシップ招聘事業等により科学技術分野も含む諸プログラムにも参加･協力した。

尚、日印国交樹立後のインド留学の草分けは、荒松雄･中根千枝･土井久弥･服部文雄各先生だが、今後の日印文化学術関係の更なる進展が望まれること、その為には様々な分野での交流、特に日印両国の青少年層の人的交流を一層推し進めることが一つの鍵ではないかと締め括られた。

素晴らしい写真他パワーポイント資料の準備も大変だったと存じます、本当に有難うございました。
質疑応答は時間の関係もあり3～4人とさせて頂いた失礼の段をお詫び申し上げます。

尚、懇親会にも多くの方にご参加頂き大いに盛り上がりました。

また講師には皆様の席を回られ種々お話し頂きました事を改めて感謝申し上げます。

「日印友好バッチ」頒布中

2013年、日印協会創立110周年を記念して、
日印の友好を表す両国の国旗が交差するデザインの記念バッチを、
皆様に実費でお分けして参りました。
在庫限りで頒布は中止とお伝えしておりましたが、
大変好評の為、追加発注し、
引き続き頒布することに致しました。
円安の影響で、今回のバッチは、会員の方には手渡しの場合、
1,000円とさせて頂きます。
(郵送の場合は、別途送料がかかります)
なお、裏面の文字は、
"1903年創立 日印協会"です。
詳細は、事務局までお問い合わせ下さい。
E-mail　partner@japan-india.com
FAX　03-5640-1576

◆インド祭り『インド政府 ICCR 派遣“南インド古典音楽公演”』 第 4 回菩提僊那継承事業 2015

インド政府 ICCR より派遣された奉納公演を行う南インド古典音楽のグループは、前日の朝 7 時に関空に来日。東大寺宿坊の華厳寮に泊まりました。夜には山口、岡山、名古屋、東京、新横浜、鎌倉などから運営を手伝ってくださるボランティアの方々が自費で駆けつけてくださいました。

5 月 18 日当日、台風の影響で心配された雨の予報も、曇天空で暑すぎずちょうどよい日となりました。継承事業の前の午後 1 時から 2 時 15 分まで、交流会が行われました。全国から 40 名ほどの方々が交流会に参加されました。ワドワ駐日インド大使は多忙な時期にも関わらず日帰りでご参加くださいました。大阪･神戸総領事も翌週にはバングラディッシュにご栄転されるという中で、ご参加されました。主催の NPO 法人日印交流を盛り上げる会の長谷川理事長の御礼挨拶の後、菩提僊那の研究家として知られる小島裕子氏から今回の座像製作にあたって菩提僊那のお話を含め、貴重なお話をいただきました。

2 時半から東大寺中門に設営した会場で、大使、総領事の他、奈良県知事代理･村井知事公室長、東大寺執事長平岡氏、東京都仏教連合会元理事山田一眞氏によるインド式オープニング点灯式が執り行われました。

続いて、ワドワ大使の「今日ここで皆様とともにインド人仏僧･菩提僊那の 1279 年前の来日を記念する継承催事に参加するため、ここ奈良に来ることが出来、大変嬉しく感じております」で始まるスピーチ、村井浩氏(奈良県県知事代理･知事公室長)より荒井正吾奈良県知事のメッセージ代読、南インド音楽ヴィーナー演奏家的場裕子氏のカルナータカ音楽についてのお話しがありました。

〈鑑賞されるワドワ大使(左)と
マハジャン総領事(右)〉

〈Shri Sridhar 氏ら 4 名による演奏〉

その後、中門に設えた特設ステージ中央に菩提僊那座像が置かれ、その前でヴァイオリン Shri Sridhar 氏ら 4 名によるカルナータカ音楽が披露されました。時間が押していたため、大使は知事表敬のために場を離れなければならなかったのですが、音楽に感動され最後まで聞かれるというハプニングがありました。

継承事業の模様はNHKによって18時半からのニュースで紹介され、翌日の読売新聞等にも掲載されました。大勢の方が全国から参列され、初めて公開された菩提僊那像にお祈りをされていました。その後、堺市役所、白隠禅師の寺として知られる沼津の松蔭寺、インド大使館でも演奏会とともに公開されました。

大使館では、ICC のヴァッツ氏のご提案により、ナマステ･インディア 2015(2015 年 9 月 26～27 日開催予定)まで引き続き公開されることになりました。

〈文･写真; NPO 法人日印交流を盛り上げる会〉

◆『インド進出・M&A 実務と日本企業が直面するインドの法律』

5 月 21 日に、松田総合法律事務所が主催した標記セミナーの概要を報告します。

標記のセミナーでは、松田総合法律事務所が、日本企業から相談を受けた具体的な事例を参考として、現地に駐在する同法律事務所弁護士からの、報告とアドバイスが発表されました。

兎角、法律関係の事項は、難しいとの感覚で敬遠しがちですが、セミナーでは、実例を以って平易な語り言葉で説明され、非常に解り良かったです。委細は省略しますが、普段より気に掛かっていた問題点がテーマとして上げられ、現地側にてどのように対応したのかの説明がありました。

具体的にお困りのことがあれば、是非、松田総合法律事務所へご相談されることが良いかと思います。

=◇ 今後のイベント ◇=

◆6 月 21 日 国際ヨガの日

6 月 21 日は、『国際ヨガの日』です。これは、昨年インドのナレンドラ･モディ首相が国連総会で『国際ヨガの日』の制定を提唱し、国連史上最速で採択されたことに依ります。

6 月 21 日に決定したのは、(年によって前後する事はありますが)この日が夏至に当たり、1 年のうちで、最も日照時間が長く、ヨガをするのに最適な日となるからだそうです。

インドでは、既にヨガ専門大学が開校され、ヨガ･アーユルベーダ省が発足しています。

この機会にヨガ未体験の方も、ヨガに触れてみては如何でしょうか。

5. 新刊書紹介
Books Review

§『台頭するインド･中国―Rising INDIA and CHINA ― 相互作用と戦略的意義 』

慶應義塾大学東アジア研究所叢書

編著: 田所 昌幸

発行: 千倉書房

価格: 3,600 円+税　　ISBN 978-4-8051-1057-7 C3031

本書は、「両者の比較と相互作用、そしてその外部への影響を考えてみること(本書はしがきより)」をテーマに、慶應義塾大学東アジア研究所において 2011 年から 3 年間に亘って共同研究した成果です。

インド、中国を軸に周辺諸国･アジア、日本、アメリカとの各国間の相互認識や、バワーバランス、国際社会の将来像について、深い考察が加えられています。

第 1 章　パワー・トランジションとしての印中台頭　　田所昌幸
第 2 章　インドの中国認識　　マリー･ラール
第 3 章　印中戦略関係の観察　　山口昇
第 4 章　印中とアメリカの戦略的相互作用　　畠山圭一
第 5 章　パキスタンから見た印中の台頭　　笠井亮平
第 6 章　二つの例外主義外交　　鈴木章悟
第 7 章　台頭する国家のシミュレーション分析　　藤本茂

§『現代インド 1，2，3，4，5，6』 東京大学出版

2010 年度から始まった、人間文化研究機構「現代インド地域研究」は、2014 年度で第 1 期が終了しました。第 1 期、5 年間の成果の一部として、『現代インド』（全 6 巻）が刊行されました。急速な発展を遂げる現代インドの各分野が網羅され、総合的な理解の助けとなる書です。

◇現代インド 1 ― 多様性社会の挑戦 / 田辺明生、杉原薫、脇原孝平 編

価格：5,400 円+税　　ISBN 978-4-13-034301-5 C3330

◇現代インド 2 ― 溶融する都市･農村 / 水島司、柳澤悠 編

価格：5,000 円+税　　ISBN 978-4-13-034302-2 C3330

◇現代インド 3 ― 深化するデモクラシー / 長崎暢子、堀本武功、近藤則夫 編

価格：5,400 円+税　　ISBN 978-4-13-034303-9 C3330

◇現代インド 4 ― 台頭する新経済空間 / 岡橋秀典、友澤和夫 編

価格：5,500 円+税　　ISBN 978-4-13-034304-6　C3330

◇現代インド 5 ― 周縁からの声 /粟屋利江、井坂理穂、井上貴子 編

価格：5,400 円+税　　ISBN 978-4-13-034305-3　C3330

◇現代インド 6 ― 環流する文化と宗教 / 三尾稔、杉本良男 編

価格：5,400 円+税　　ISBN 978-4-13-034306-0　C3330

§『原典でよむ　タゴール』岩波現代全書 063

著者：森本 達雄

発行：岩波書店

価格：2,600 円+税　　ISBN 978-4-00-029163-7 C0397

ラビンドラナート･タゴールと言えば、日本では、アジアで初めてノーベル賞（文学賞）を受賞した文学者として広く知られています。しかし、タゴールの思索は文学のみに留まらず、哲学から科学にまで及びました。

本書は、そういったタゴールの詩･論文･講演･紀行記、作家や科学者との対談、友人たちとの書簡からの抜粋からなる、アンソロジーです。美しい言葉が散りばめられた奥深い精神世界を感じるノーベル賞受賞作『ギータンジャリ』の世界に浸る一方で、現実世界の平和や人間の安寧を求め続けたタゴールの想念に触れる事が出来ます。

タゴールがノーベル賞を受賞してから 100 年余りが経ちますが、その言葉･思考に、今なお新鮮さを感じます。タゴールに初めて出会う書としても、タゴールに深く傾倒する方にとっても、お勧めの一冊です。

§ 各研究機関からの機関誌の紹介（到着順）

	機関誌名	編集発行
	『現代インド研究』 第５号 2014 年　Vol. 5 ISSN 2185-9833	編集:『現代インド研究』編集委員会 発行: NIHU プログラム「現代インド地域研究」 http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/static_indas/cn_5 からダウンロードできます。
	『広島大学 現代インド研究 -空間と社会』第５号 ISSN 2185-8721	編集発行: 広島大学現代インド研究センター/人間文化研究機構 地域研究推進事業「現代インド研究」広島大学拠点 http://home.hiroshima-u.ac.jp/hindas/journal2014.html　から ダウンロードできます。
	『アジア研究所紀要 第四十一号（2014 年）』 ISSN 0385-0439	編集兼発行者: 亜細亜大学アジア研究所
	公益財団法人中村元東方研究所 2014 『東方』 第 30 号 ISSN 2186-0440	編集兼発行人: 公益財団法人中村元研究所

≪ 訃　　報 ≫

町村信孝前衆議院議長が、６月１日、逝去されました。
町村氏は、日本･インド友好議員連盟会長として、両国の友好に努められました。
シン首相、モディ首相来日の際に開催した協会主催の首相歓迎会においても、ご協力を賜りました。
協会からは、森喜朗会長より弔電をお送り致しました。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

6. 掲示板
Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回発送は、2015年7月17日(金)を予定しております。7･8月合併号ですので、8月の発刊はございません。催事チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

〈編集後記〉

2月の内閣府立入検査の時に、事務局長が理事会や評議員会に参加される役員の方々にお渡しする交通費の金額を伝えたところ、「えぇっ、(役員の方は無報酬の上に)そんなに安いんですかっ!? もう少し出してもいいと思いますよ」と、検査担当者の方が驚かれていました。

5月には、事務所で使用していた電話機(ビジネスフォン)のリースアップに伴い、新電話機のリースを0社と契約しました。毎度の事ながら、極限まで値引き交渉を重ね、後は社判を押すだけという段になり、事務局長と編集子でちょっとした荒業を繰り出したところ、窓を開け放った涼しい事務所で、営業マンが、「イヤな汗が出てきました」と汗を拭い始めました。編集子が団扇をお貸ししましたら、その優しさに感激したのか、ついに営業マンは、更なる値引きをしてくれたのです。

あだや1円たりとも疎かにはできないという、事務局長の決意の程をご理解頂けるでしょうか。

しかし、協会の運営は会員の方からの会費で賄っているのですから、当然の事です。

今年度から、やむを得ず個人会員会費を値上げしましたが、多くの方から引き続きご支援賜り、事務局員一同衷心より感謝申し上げます。今後も、会報『月刊インド』、Web 季刊誌『現代インド･フォーラム』を始め、イベント等、皆様のお役に立てる情報を発信して参ります。

(記 渡邊恭子)

入会随時受付中

日印協会は、1903年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の3名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人･個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員･個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費：	個人	8,000円/口	☆入会金	個人 2,000円
	学生	4,000円/口		学生 1,000円
	一般法人会員	100,000円/口		法人 5,000円
	特別法人会員	150,000円/口		(一般法人、特別法人会員共に)

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解･ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

月刊インド Vol.112 No.5 (2015年6月12日発行) 発行者 平林 博 編集者 笹田 勝義
発行所 公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: http://www.japan-india.com/